

モニタリングサイト1000

陸生鳥類調査 情報

2014年 8月号 Vol.6 No.1



結果速報

モニタリングサイト1000 2013年度越冬期 一般サイト結果速報 森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000か所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420か所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただき、森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査（繁殖期および越冬期）および植生概況調査（繁殖期のみ）を実施を行っています。2013年度の越冬期は、繁殖期に調査を実施した84サイトのうち、積雪などで調査不可能なサイトをのぞいた、森林55サイト、草原11サイトに調査をお願いしました。ここでは、本原稿執筆時にデータが集まっている森林37サイト、草原5サイトの計42サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類

合計102種（森林91種・草原59種）の鳥類が確認されました。調査箇所数の多い森林サイトの記録種数を昨年と比較すると、昨年は48サイトで95種だったので、僅かに少ない値でした。ただし、今回の越冬期の結果はまだ集計段階で調査サイト数が昨年よりも少ないので、これらを考慮すると、今年の出現種数は昨年並か少し多いのかもしれませんが。なお、調査サイト数と出現種数の関係については詳細を後述します。次に、森林における出現率、優占度の上位種を表1に示しました（出現率：ある種の出現サイト数÷調査サイト数×100、優占度：サイトでのある種の個体数÷総個体数×100を平均したもの）。過去の出現率を見てもみると、第1期（2004-2007年度）および第2期（2008-2013年度）の上位種は、年により種の多少の入れ替わりはありますが、ほぼ一致していました。第2期の出現率の上位10種

表 1. 2013年度森林サイトにおける出現率と優占度の上位種

a) 森林サイトの出現率 (n=37)			b) 森林サイトの優占度 (n=37)		
順位	種名	出現率	順位	種名	平均優占度
1	ヒヨドリ	91.3	1	ヒヨドリ	14.1
2	コゲラ	91.9	2	エナガ	9.5
3	シジュウカラ	86.5	3	シジュウカラ	7.7
3	ハシブトガラス	86.5	4	メジロ	6.7
3	ヤマガラ	86.5	5	ヤマガラ	4.8
6	エナガ	78.4	6	マヒワ	4.2
7	カケス	64.9	7	ヒガラ	4.0
8	ヒガラ	54.1	8	コゲラ	3.4
8	メジロ	54.1	9	カワラヒワ	3.3
10	キジバト	51.4	10	アトリ	3.2

はウグイス、エナガ、カケス、カワラヒワ、キジバト、コゲラ、シジュウカラ、シロハラ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒヨドリ、メジロ、ヤマガラ、ルリビタキ（五十音順）のいずれかでした。とくに上位種の順位は安定しており、第2期では一昨年まで上位5種はほぼ同じ種でした（なお昨年のみ傾向が異なりヤマガラが上位に入っていました。これについても後述します）。今年も一昨年以前と同様の傾向が見られる一方で、昨年に引き続きヤマガラが上位に入っており、一昨年以前の結果と昨年の結果を合わせた中間的な状況といえそうです。また、優占度に目を向けると、群れや混群をつくる種で占められており、冬の鳥類に見られる特徴的な生態が結果へ反映されたものといえるでしょう。

調査サイト数と出現種数の関係

前述のとおり、調査サイト数は出現種数に影響します。調査するサイト数が増えれば確認される種数も増加するのです。ただし、種数が劇的に増えていくのは調査サイト数が少ないときです。サイト数が多くなると、あまり変化しなくなります。例えば、5サイトしか調べていないときに確認種数が30種、10サイトに調査数を増やしたら45種へと増えたとします。一方、30サイトを35サイトへ増やしたら、確認種数が90種から95種に増えたとします。前者と後者は、どちらも同じ5サイトの増加ですが、後者は少ししか確認種数が増えていません。このように、ある程度のサイト数を調べれば、出現種数の増加は落ち着いてくるのです。その理由は、調査サイト数を増やすことで最初は様々な環境が新規に追加されてゆきますが、その後は、目新しい環境も減ってゆき、共通して確認される種が増え、新規に記録される種が減ってくるからです。

モニタリングサイト1000の森林・草原一般サイト鳥類調査では、全国に多数の調査サイトを設置しています。そして、5年で一巡、つまり、全国をカバーするように設置した複数の調査サイトを、毎年入れ替えながら5年で全てのサイトを調査する（1期=5年）という調査体制になっています。積雪の影響や事務局・調査員の皆様のご都合等で、調査サイト数は年変動してしまっていますが、なるべく毎年同等数を調査できるような体制の維持に努めています。このような体制によって、毎年の出現種数がほぼ同数という結果が得られており、全国の傾向をモニタリング出来ている事の裏付けにもなっています。

昨年度の優占種の動向

上位種の傾向は、一昨年以前と昨年で異なる傾向が見られていました。その違いとは、一昨年以前は例年5-6位だったヤマガラが、昨年初めて順位が急上昇して2位に入ったことです。この傾向は一般サイトだけでなく、コアサイトでもみられ、ヤマガラが増加傾向が示唆されました。その理由として、昨年はヤマガラが繁殖が他種以上にうまくいった可能性が考えられました。実際、ヤマガラの出現率は一昨年以前と比較しても高い値となっており、他種の減少ではなくヤマガラが増加が示唆されていました（表2）。この傾向が継続するかどうかは今年度の着目点の一つです。さて結果を見てみると、今回は一つ順位を落とし、シジュウカラ、ハシブトガラスと同率3位となりました。出現率の値は昨年同様の高い値を維持しています（表2）。今後、集計サイト数の増加に伴い順位が多少変動するものと考えられますが、それでも3-5位のいずれかに落ち着くものと思われます。こうした結果から、一昨年以前と昨年の中間的な状況が今年度のヤマガラの結果であろうと解釈されます。また昨年のもう一つの特徴として、エナガの出現率の急落（約60%、10位）がありましたが、今回は（78%、6位）と例年通りの値に戻っています。エナガの変動はヤマガラと異なり、昨年の一時的なものであったようです。変動のあった年（昨年度）の次年である今年度の結果のみからの解釈には、現時点では不透明な面も伴いま

表 2. 第2期5年間(第2期2008-2012年度)と今回(2013年度)の森林サイトにおけるヤマガラの出現率の比較

年度	順位	出現率
2008-2011	5または6	81.8-74.2
2012	2	87.5
今回(2013)	3(同順位他種有)	86.5

す。昨年度の変動が一時的なものだったのか、いまだ継続中なのかについては、今後数年の傾向を継続確認する事で、将来、明らかになっていくことでしょう。

調査へのご協力ありがとうございました

長期継続調査の結果を横断的に概観することにより、今回ご紹介したような出現傾向の変化や安定性が読み取れます。単年度で見ていると分からないことでも、長期調査ならば明らかにできることも多いのです。今回の結果からモニタリングサイト1000の有用性の一端を感じていただけたと思います。日本の環境変化のモニタリングのためには、調査の継続と多くの方々のご協力が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2013年度越冬期の一般サイト調査には、73名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます(敬称略、順不同)

阿部智, 荒哲平, 石井省三, 石川喜春, 今川義康, 荻原千恵美, 川崎康弘, 工藤洋子, 工藤芳郎, 小山信行, 今野美和, 今野怜, 齋藤誠一, 鈴木洋子, 関根一広, 津田浩, 中西和夫, 中西正和, 西村泉, 根本幸子, 野中純, 山本貴仁, 横田嫩子, 鷺田善幸, 伊藤恭博, 稲田菊雄, 塩嶋保二, 横田敬幸, 岩田篤志, 岩本孝, 岩本富雄, 吉田良平, 久高将和, 橋本祐子, 橋本了次, 江島浩紀, 溝口文男, 荒井浩, 香西宏明, 山田三夫, 篠原盛雄, 小笠原正博, 小山健, 小山朋子, 小川次郎, 小野島学, 森茂晃, 森眞, 成田富美子, 成田脩三, 斉藤信, 川崎里実, 川崎康弘, 川南勉, 前田和浩, 増田裕, 多田英行, 太田和己, 大島孝之, 中井節二, 塚原和之, 渡辺貴美恵, 渡辺央, 渡辺健三, 渡辺奈央, 渡辺靖夫, 楠木憲一, 日比野政彦, 福田正淑, 平野賢次, 木原直人, 矢本賢, 揉井千代子

*2012年度越冬期調査にご協力いただいた生田誠二様のお名前が抜けておりました。お詫び申し上げます。

レポート

モニタリングサイト1000調査に参加して 吉田宗史（東北大学野鳥の会）

私たち東北大学野鳥の会は、今年度からモニ1000の準コアサイト青葉山（宮城県仙台市）の調査をすることになりました。ここは私たちが日頃の活動でよく足を運ぶ場所でもあり自分たちの手で調査をできることを嬉しく思いました。

この調査に参加するきっかけとなったのは昨年末に行われたモニ1000の講習会でした。その際にバードリサーチの方から紹介いただき、講習会に参加していた私がほぼ独断で引き受けるという流れだったのです。他の会員が協力してくれるか不安でしたが、予想以上に多くの会員が関心をもってくれたので「東北大学野鳥の会」として調査に臨むことができました。

さて、講習会の時には調査はあまり難しくないと思ったのですが、実際に早朝の調査を実施してみると1つ1つの鳥の声を区別するのが難しく、非常に苦労しました。2分毎の記録をまとめるたびに手間

取ってしまい、1定点の調査に20分以上かかってしまうこともありました。結局、初回の調査では終了時間をオーバーしてしまい、効率よく調査する工夫が必要だと感じました。

そして迎えた繁殖期2回目の調査。前回の反省が生かされて非常に手際よく調査をすることができました。しかも普段の探鳥会ではなかなか登場しないサンコウチョウが何度も現れ、参加した会員は大喜びでした。通い慣れた青葉山でもまだまだ新しい発見があることがわかり、冬の調査も今から楽しみです。

現在私たちのサークルは意欲的な会員が多く、今回の調査も楽しんで行うことができました。今後も、後輩たちに調査の重要性や大学のサークルが取り組む意義を伝え、モチベーションを上げたいです。

最後に今回の調査でお世話になったバードリサーチと野鳥の会宮城県支部の皆様へ心より感謝するとともに、これを機に今後も交流が続くことを願っております。



結果速報

2013年度 コア・準コアサイト鳥類調査
越冬期結果報告

植田睦之(バードリサーチ)

冬鳥の多かった2013年度のコアサイト

2013年の越冬期は、18サイトで調査を行ないました。準コアサイトでは2回目の調査結果の蓄積が進みつつあります。

越冬期の調査は、積雪等によりアクセスが困難なサイトでは調査を行なっていませんが、毎年調査を行なっているコアサイトおよび一部の準コアサイトの経年変化を見てみると、繁殖期と比べて種数もバイオマスも変動が大きい傾向にありました。これは繁殖期は、多くの鳥はなわばりを構えているので、生息種も個体数も安定しているのに対して、越冬期の鳥は群れになっている種も多く、食物の状況に応じて、自由に移動するために、変動が大きいのだと考えられます。

そのなかでも今年は、特に雨龍、小佐渡、小川、筑波山、秩父、和歌山などでバイオマスが大きい傾向がありました(表1)。

出現率および優占度の上位種について過年度と比較してみると(表2)、出現率については、上位10種に入る冬鳥は、例年はシロハラ程度なのに対し、今年はアトリとツグミが入っていたのが目立った点でした。優占度は、アトリとツ

表 2. 過去3年間の出現率および優占度の上位10種。赤は冬鳥を示す

2013年度		2012年度		2011年度	
出現率					
1 ヤマガラ	94.4	ヒヨドリ	94.4	ヤマガラ	90.0
2 コゲラ	88.9	ヤマガラ	88.9	コゲラ	85.0
3 ヒヨドリ	83.3	コゲラ	83.3	ヒヨドリ	85.0
シジュウカラ	83.3	カケス	72.2	シジュウカラ	85.0
5 メジロ	61.1	シジュウカラ	72.2	ハシブトガラス	80.0
エナガ	61.1	メジロ	72.2	メジロ	70.0
ハシブトガラス	61.1	エナガ	61.1	キジバト	55.0
8 ヒガラ	55.6	シロハラ	61.1	アオゲラ	55.0
9 アトリ	44.4	ハシブトガラス	55.6	シロハラ	55.0
ツグミ	44.4	ゴジュウカラ	44.4	ヒガラ	55.0
優占度					
1 ヒヨドリ	12.1±11.2	ヒヨドリ	9.9±6.8	エナガ	8.3±15.7
2 マヒワ	9.8±19.5	メジロ	9.8±9.5	ヒヨドリ	8.3±8.7
3 アトリ	8.9±7.2	ヤマガラ	9.3±9.0	ヒガラ	6.9±13.6
4 メジロ	7.2±9.8	エナガ	7.4±8.9	アトリ	6.1±15.6
5 ヤマガラ	6.1±4.9	コゲラ	5.4±4.5	ヤマガラ	5.9±6.6
6 シジュウカラ	4.8±4.0	シジュウカラ	5.2±5.5	メジロ	5.6±7.3
7 コゲラ	4.6±4.2	カケス	5.0±7.1	ハシブトガラス	4.5±8.3
8 エナガ	4.5±6.6	コガラ	3.6±7.5	シジュウカラ	4.2±5.3
9 ヒガラ	4.1±6.1	キクイタダキ	3.4±8.7	ツグミ	3.9±4.6
10 ツグミ	4.1±8.4	ゴジュウカラ	3.3±4.9	ツグミ	2.8±8.4

グミに加え、マヒワも上位に入っていました。今冬バイオマスの大きかった調査地では、これらの種が多く記録されており、今年は冬鳥が多かったようです。

山で冬鳥の多い年は低地で少ない？

このように、モニ1000コア・準コアサイトでは、冬鳥が多かったのですが、イスカやベニヒワを除けば、「今冬は冬鳥が少ない」と多くの人が感じていたようでした(バードリサーチニュース Vol 11 No 4)。なぜこのような違いが生じたのでしょうか？ 実はこうしたモニ1000の結果と、多くの人が感じる鳥の多さとの不一致はここ3年連続してみられています。去年は冬鳥が多いことが話題になった年でしたが、モニ1000サイトでは、鳥の記録が少なく、一昨年はモニ1000サイトで鳥が多く、逆に冬鳥が少ないと言われた年でした。

多くの人は、冬に山奥まで鳥を見に行くことはしませんので、「冬鳥が多い少ない」を感じるのは低地低山の鳥の状況です。それに対してコア準コアサイトは山奥に調査地があることが多いので、この場所の違いが不一致をもたらしているようです。

今冬は山の実が豊作、昨冬は凶作、そして一昨冬は豊作でした。豊作の年は山に鳥が留まり、凶作の年は山から鳥が低地に降りていくことで、こうした不一致が生じる可能性を、今年の調査でも再確認することができました。

冬鳥の飛来数は、こうした分布の変化以外にも、当然、繁殖成否や死亡率の高低に伴う数の変化の影響も受けます。今後もモニタリングを続けることで、そうした影響も含め、冬鳥の増減に影響する原因を明らかにしていきたいと思います。

調査ありがとうございました

2013年の現地調査にあたっては、岩本富雄、植田睦之、川崎慎二、金城孝則、佐藤重穂、篠原詩織、外間 聡、高美喜男、知花重治、中村聡、中村豊、森本浩司、沼野正博、平野敏明、松井理生、柳田和美(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

表 1. 2009～2013年越冬期コア/準コアサイトの確認種数とバイオマス

サイト名	越冬期種数					越冬期バイオマス(kg/10ha)				
	2009	2010	2011	2012	2013	2009	2010	2011	2012	2013
雨龍	8	12	8	8	19	2.83	6.66	0.63	1.02	5.42
野幌		20					21.44			
宮小牧	15	16	14	12	16	5.98	25.83	22.38	22.97	22.98
青葉山		28					79.10			
小佐渡	24	21	22	20	25	11.97	14.09	18.88	10.47	38.07
那須高原	22	18	19	19	23	5.14	2.31	12.70	3.58	4.78
小川	25	27	15	23	24	10.57	22.68	10.84	7.41	24.16
高原山	14				19		5.01			4.12
筑波山	23				27	11.12				28.19
大山沢	14	16	15	12	11	3.78	2.37	4.36	3.24	1.23
秩父	19	17	18	20	18	3.55	3.26	10.39	5.84	8.16
西丹沢	15				15	6.43				4.68
富士			22					15.88		
函南		21					8.35			
愛知赤津	14	12	11	12	12	9.02	10.85	12.53	7.24	8.24
上賀茂	19	22	16	21	20	23.79	15.61	33.13	23.41	24.68
春日山			23				32.26			
和歌山	17	9	14	13	17	7.52	1.05	6.05	1.84	8.63
半田山			14					1.74		
宮島	18					115.42				
市ノ又	12	14	13	15	10	3.16	5.42	4.64	2.73	2.81
佐田山				18					13.41	
対馬龍良山				14					6.31	
粕屋			17					15.43		
椎葉	21					7.46				
鏡		20	18	13	15		4.99	3.92	4.32	6.99
田野	18	21	16	19	21	12.63	13.55	5.61	9.71	8.37
屋久島照葉樹林		13					22.51			
屋久島スギ林				11					2.73	
奄美	16	20	15	13	15	30.62	35.48	10.21	14.27	14.31
与那	17	17	13	18	17	38.98	30.44	23.33	20.04	21.93
西表	15					18.13				
小笠原石門			5					3.35		

結果速報

シカの影響が見えてきた ～藪の鳥が減っている大山沢、椎葉サイト～ 植田陸之(バードリサーチ)

シカによるササが減少

2014年の繁殖期、宮崎県椎葉の準コアサイトの2回目の調査に行きました。驚いたのが調査地の植生の変わり様でした。2010年の調査の際にスズタケに覆われていた林が、今回はスカスカの林になっていました(図1)。

この林だけでなく、日本のその他の森林でも、シカによる植生の変化が生じている場所が多くあります。埼玉県の大山沢コアサイトでも大きな変化が生じていますので、椎葉と大山沢で見られた鳥の変化をご報告したいと思います。



図1. 2010年と2013年のスズタケの繁茂状況の比較。

2010年5月

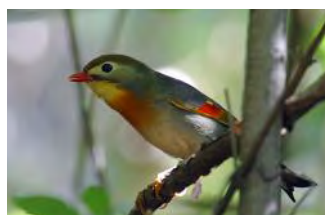


2014年5月

ソウシチョウが減った椎葉の森

シカの採食により、スズタケが減ると、スズタケのような藪を利用している鳥が減ると考えられます。椎葉サイトには藪を利用する鳥としてはウグイスとソウシチョウがいます。そこで、センサスでの記録数を2010年と2014年とで比べてみました。

ソウシチョウの定点あたりの記録数の平均は2010年は2.5羽を越えていたのに対して、2014年は1羽強とほぼ半減していました(図2)。ウグイスも同様に大きく減少していました。スズタケがこれだけ少なくなるとこれらの鳥たちには生息にくくなるのでしょう。外来種のソウシチョウは九州では分布を拡大し、個体数も増加し、森林の優占種になってい



ソウシチョウ(左:守屋年史 撮影)とウグイス(右:小松周一 撮影)

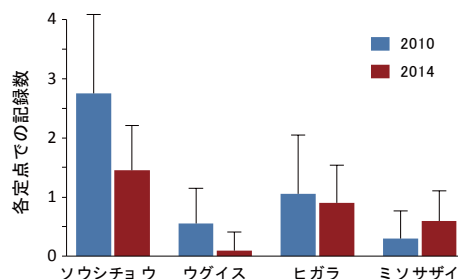


図2. 椎葉サイトの主要鳥類の記録数の2010年と2014年での比較。

る鳥です。しかし、シカの増加により再び個体数を減らし、分布が縮小するのかもしれません。ただし、林床にはシカが嫌いなアセビの稚樹がもう出てきていました。アセビの藪ができると、ソウシチョウは再び増えるのでしょうか？ 今後の動向を注目していきたいと思います。

減っていたソウシチョウやウグイスとは反対に樹冠を利用するヒガラの数には変化は見られませんでした(図2)。また、地上を利用するミソサザイは逆にやや増えているようにした。スズタケのなくなった地上にはゴロゴロした岩がむき出しになっていて、ちょうどミソサザイが好む溪流のようになっていました。こうした環境ができたことでミソサザイが増えつつあるのかもしれません。

大山沢ではウグイス、コマドリ、コルリが...

大山沢サイトもシカの影響が見られています。今年はそれにササの開花も重なり、林床は枯れたササ原になってしまいました。

それが影響してか、大山沢に生息する藪に依存する鳥、ウグイス、コマドリ、コルリのいずれもが2010年から減少傾向にあります(図3)。それに対して、樹木や地上性の主要種、ゴジュウカラ、ヒガラ、ミソサザイについては明確な傾向はみられていません。

大山沢は沢沿いで気温が低いいためか、ササのなくなった場所には椎葉サイトのようにシカが嫌うアセビなどの低木は生えておらず、代りにバイケイソウなどが生えています。こうした草本では藪に依存する種は生息できないと考えられます。今後の植生や鳥類の変化についてみていきたいと思います。



大山沢サイトの林床の様子

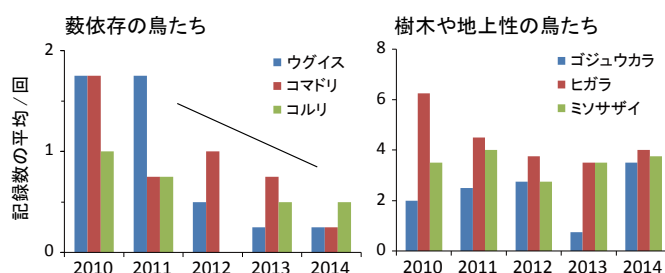


図3. 藪に依存する鳥と樹木や地上性の鳥類の2010年からの記録状況の変化の違い

レポート

景観構造と生物多様性の関係を理解する

片山直樹(農業環境技術研究所)

景観構造と生物多様性

わが国には、里山など人が手を入れることで維持されてきた景観が非常に多く存在します。こうした景観は、水田、草地、雑木林など数多くの要素から構成されており、生態学的にはモザイク景観と呼ばれます。こうしたモザイク景観には、その長い歴史のなかで、多くの生物が適応し、生息場所としてきました。そのために、現在でも種多様性が非常に高いと考えられます。

しかし、広い森林や草原など、より均質な景観を好む種にとって、モザイク景観は生息地の分断化を意味するでしょう。これらの種は、モザイク景観により生息できる場所が限定されてしまっているかもしれません。この仮説を検証しておくことは、限られた資源のなかで保全努力をどのように分配するかという意思決定においても有効な知見になります。

モニタリングサイト1000プロジェクトでは、統一された調査方法のもと、全国各地で生物データを継続して記録しています。そこで私たちは、2003年から2009年までに313地点で得られた陸生鳥類のデータ(森林草原のデータおよび里地里山のデータ)を利用し、広い範囲に生息する種と狭い範囲に生息する種では、景観構造(モザイクか均質か)に対する応答が異なるのかどうかを検証しました。

各種の生息範囲の広さに着目

解析にあたり、まず各種の生息範囲の広さを定義しました。これはモニタリングサイト1000ではなく、環境省第6回自然環境保全基礎調査・鳥類繁殖分布調査のデータを使用しました。本データでは、全国を20kmメッシュに区切り、合計約1200のうち何メッシュで各種の生息が確認されたか記録されています。これを見ると、ウグイスやメジロなど全域にわたって生息する種から、セッカ、オオセッカやサンコウチョウなど狭い範囲に生息する種まで様々でした(図1)。今回は、比較のために400メッシュ以上で確認されている種を”広域種”、それ以外を”狭域種”と定義しました。そして改めて、モニタリングサイト1000の各調査地点における全種数、広域種の種数、狭域種の種数を計算しました。こ

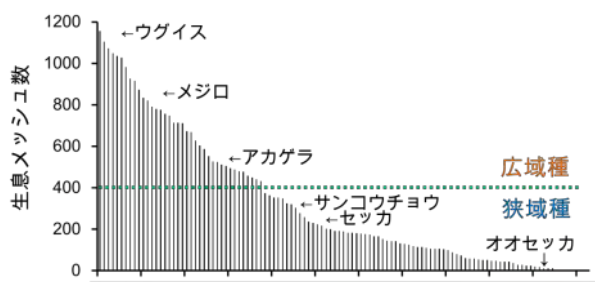


図1. 鳥類繁殖分布調査での各種の生息メッシュ数。今回は400メッシュ以上を広域種、未満を狭域種と定義した。

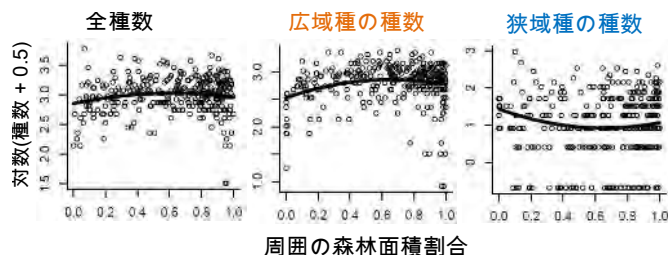


図2. 全種、広域種および狭域種の種数と森林面積割合の関係。1つの点が各調査地点の値を表す。縦軸(種数)は対数をとっている。曲線は統計モデルから得られた回帰曲線。

れらを説明するための景観構造の指標として、調査地点の周囲1-10kmにおける森林面積を用いました。その結果、全種数および広域種の種数は森林面積が中程度のモザイク景観で最大になりました(図2)。一方、狭域種の種数は逆の応答を示し、森林面積が低いまたは高い均質景観で最大になりました(図2)。種数だけでなく、各種の個体数についても同様の解析を行いました。やはり種数の結果を支持するものでした(図3)。

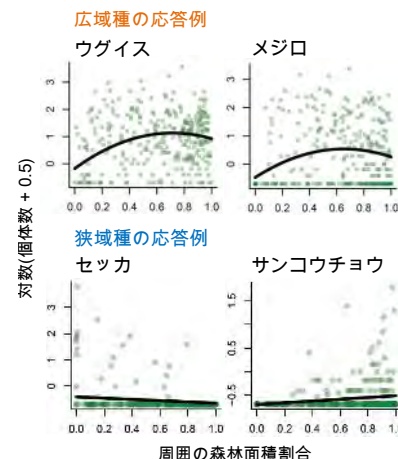


図3. 広域種の代表例としてウグイスおよびメジロ、狭域種としてセッカおよびサンコウチョウの応答を示す。前者は森林率が中程度の景観を好むのに対し、後者はそれぞれまとまった草原または森林を好むことが分かる。

結果が示すこと

今回の結果から、モザイク景観では確かに鳥類の種多様性が高いことが分かりました。しかし同時に、狭域分布種など保全の必要性が高い種にとって、必ずしも好ましい景観ではないという可能性も示されました。私たちは、一体どのように生物多様性の保全を進めれば良いのでしょうか。大切なことは、それぞれの地域がもつ土地利用の歴史や生物相を考慮しながら、守るべき対象を明確にする、ということではないでしょうか。特定の希少種を守るのか、それとも種多様性を最大化させるのか。答えは地域によって様々だと思います。どちらの場合でも、保全対象を明確にしておくことで、関係者の間でイメージを共有しやすくなり、より効果的な保管理に近づくことが期待できます。

今後、モニタリングサイト1000が継続され、それを活用した研究事例が増えていけば、さらに具体的な保管理への提言が可能になるでしょう。このような大規模長期モニタリング調査は、私たちの生き方をも左右する極めて重要なプロジェクトだと私は考えています。

Katayama N, Amano T, Naoe S, Yamakita T, Komatsu I, Takagawa S, Sato N, Ueta M & Miyashita T (2014) Landscape heterogeneity-biodiversity relationship: effect of range size. PLOS ONE 9: e93359.

事務局からのお知らせ

モニタリングサイト1000 研修・交流会のご案内

荒 哲平(日本野鳥の会)・植田陸之(バードリサーチ)

モニタリングサイト1000陸生鳥類調査も今年で10年目を迎えました。このような、市民による大規模かつ長期的な調査には、調査員の皆様の継続的なご協力が欠かせません。また、次世代の調査員の確保も必要です。陸生鳥類調査ではモニタリングサイト1000の事業紹介と調査方法の共有のための研修会を全国各地で行なってきました。

今年度の研修会では、昨年度に引き続き、各地域でさまざまな調査活動をされている方の成果発表や情報交換を通して、参加者同士の交流を深めることを主な目的として実施します。これによって調査員の方々のモチベーションの維持と、野外での調査活動そのものに関心を持っていただけの方が活動をはじめるきっかけになればと考えております。昨年の研修会では、鳥類の調査に関心はあるが経験のない方にも参加いただき、中には新たな調査員として調査に参加いただいている方もおられます。

今年は右記のとおり、4か所で開催することになりました。詳細な日程や会場は、HPやメールでご案内いたします。



参加申し込み先

インターネット

<http://www.wbsj.org/activity/conservation/research-study/monitoring1000/moni1000-training/>

郵送およびFax(日本野鳥の会 モニタリング係)

〒141-0031 東京都品川区西五反田3-9-23丸和ビル

FAX: 03-5436-2635

お名前、お電話、メールアドレス(あるいはFAXかご住所)、参加会場、参加日程、事例発表の有無、懇親会参加の有無をお知らせください。

モニタリングサイト1000 調査研修会

【主催】 日本野鳥の会 ・ バードリサーチ

【開催場所】

<北海道> 日時未定

酪農学園大学 & 野幌森林公園

<福島県> 2014年10月4日(土)～5日(日)

福島県青少年会館 & 福島市小鳥の森

<東京都> 2014年12月13日(土)～14日(日)

日本野鳥の会事務所 & 国立科学博物館附属自然教育園

<愛知県> 2014年11月1日(土)～2日(日)

名古屋工業大学 & 名古屋市平和公園

【内容】

初日 午後から

モニタリングサイト1000の事業概要とこれまでの成果

参加者による事例発表*と 情報交換

※団体・個人の活動に関わらず、話題を提供いただける方を募集します。

東京会場のみ内容が異なります。解析編ということで、調査地の周囲の環境やその変化を知るための、GISを使った手法を学びます。QGISというソフトウェアを使います。各自ご自身のコンピュータをご持参ください。

講義終了後:懇親会

2日目 午前中のみ

野外実習:鳥類のスポットセンサス法と簡易植生調査

【参加対象】

調査に興味のある方(経験不問)

(会場の都合で20～40人程度まで。定員を超えた場合は参加できないことがあります)

【参加費】

無料(ただし懇親会費等は実費を徴収 学生割引もあります)。

お問い合わせ先

荒 哲平(日本野鳥の会)

Tel: 03-5436-2633 Fax: 03-5436-2635

Mail: ara-t@wbsj.org